

神様の豊かさ

The Abundance of God *

鈴木寛 (Hiroshi Suzuki)

聖書：

32：イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、「この群衆がかわいそうである。もう三日間もわたしと一緒にいるのに、何も食べるものがない。しかし、彼らを空腹のまま帰らせたくはない。恐らく途中で弱り切ってしまうであろう」。33：弟子たちは言った、「荒野の中で、こんなに大ぜいの群衆にじゅうぶん食べさせるほどたくさんのパンを、どこで手に入れましょうか」。34：イエスは弟子たちに「パンはいくつあるか」と尋ねられると、「七つあります。また小さい魚が少しあります」と答えた。35：そこでイエスは群衆に、地にすわるようにと命じ、36：七つのパンと魚とを取り、感謝してこれをさき、弟子たちにわたされ、弟子たちはこれを群衆にわけた。37：一同の者は食べて満腹した。そして残ったパンくずを集めると、七つのかごにいっぱいになった。38：食べた者は、女と子供とを除いて四千人であった。39：そこでイエスは群衆を解散させ、舟に乗ってマガダンの地方へ行かれた。

口語訳：マタイによる福音書 15 章 32 節-39 節

パンの奇跡

二度目

今日（きょう）の聖書の箇所には「イエスが七つのパンと少しの魚（うお）をさいて四千人以上の群衆に与え、人々は食べて満腹し、残ったパンくずを集めると七つの籠（かご）¹いっぱいになった」と記（しる）されています。マタイによる福音書 14 章 13 節から 21 節にも似た記事が記（しる）されており、そこには「五つのパンと二匹の魚（うお）をさいて五千人以上の群衆に与え、すべての人が食べて満腹し、

パンくずの残りをあつめると、十二の籠（かご）²にいっぱいになった」とあります。この 14 章の記事は、詳細はことなりますが、マルコ、ルカ、さらに、ヨハネにも記（しる）されていますから、特別に重要なできごとだったと思われる。今日（きょう）読んで頂いた 15 章の記事は、マタイとマルコに書かれています。

パンをさく

マタイ 14 章 19 節には「そして群衆に命じて、草の上にもすわらせ、五つのパンと二ひきの魚（うお）とを手に取り、天を仰いでそれを祝福し、パンをさいて弟子たちに渡された。弟子たちはそれを群衆に与えた。」とあり、今日（きょう）読んで頂いた 15 章 35,36 節には「そこでイエスは群衆に、地（ち）にもすわるようにと命じ、七つのパンと魚（うお）とを取り、感謝してこれをさき、弟子たちにわたされ、弟子たちはこれを群衆にわけた。」とあります。パンと魚（うお）を、祝福し、感謝してこれをさいて、弟子たちにわたしています。

使徒行伝にはこの「パンをさく」という表現が何回か現れます。またルカ 24 章のエマオの途上で、二人の弟子に復活の主が現れたことが記（しる）された箇所にも「一緒に食卓につかれたとき、パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、彼らの目が開（ひら）けて、それがイエスであることがわかった。」とあります。

わたしは、大学生のころ、会津の奥の奥只見で、わたしが所属していた東京の教会と、会津の教会の青年会が合同で、ワークキャンプをしたことがあります。そこではじめて、パンをさき、感謝してともに食事をする経験をしました。そのとき、みなで「パンをさく」ことに関する聖書の記事を調べたのを思い出します。

三つの解釈

マタイ 15 章に戻りましょう。みなさんは、何が起こったのだと思われますか。

*国際基督教大学教会収穫感謝礼拝, 2013 年 11 月 24 日

¹Mt15:37 spuris Acts 9:25 では、パウロを入れてつり下げている。ここでの詳細は不明だが、おそらく 14:20 のものより大きいかご。

²Mt14:20 kophinos 腰につける小さな籠

これは、もちろん、奇跡が起き、イエスの手元でパンが物理的に、どんどん増えていったということ以外考えられない。わたしたち一人ひとりの罪のために十字架にかけられ、死に、よみがえらされた神の御子であるなら、そして、このまったく救いようがない、うじ虫の様な、罪人のわたしを救って下さる、そんな奇跡をなされる方であるなら、パンを増やすぐらいはそれほど難しい事ではないと、信じる事ができるかもしれません。

いや、これは、聖餐式のようなもので、イエスが感謝してすこしずつ分けてくださった、そのパンのかけらに与（あずか）ることで、人々は霊的にも、そして肉体的にも祝福をうけ、満たされたのだと考える方もおられるかも知れません。

あるいは、今日（きょう）の箇所では、三日も、人里離れた所に一緒にいると書かれていますから、食べるものを何も持っていない方がおかしい。事実、32節で「何も食べるものがない」と言われているにもかかわらず、弟子たちは、七つのパンと小さい魚（うお）を少し差し出しています。イエスが、この少しのパンと魚（うお）を感謝してさき、一人ひとりに配られる姿を見て、イエスを通してもたらされた様々な神様からの恵みと祝福に感謝して、それぞれが少しずつ持っていたものを出し合い、分かち合いはじめ、最終的には、みなが満腹し、さらに、残ったパンくずを集めると七つのかごいっぱいになった、と言うことではないか、と考える方もおられるかも知れません。

わたしは、この三番目の解釈を、高校生のころ、おそらく、ウィリアム・バークレイの「信徒のための聖書講解」で読み、なにか特別な魅力を感じたのを思い出します。1970年ごろですから、使徒行伝に書かれている、原始共産制を理想として唱えるひとたちの話しを何度も聞いていたことも影響しているかも知れません。

感謝と献金

収穫感謝聖日

今日（きょう）は、収穫感謝聖日です。日々を感謝のうちに生きること。そして、神様への感謝として献げる献金について、すこしご一緒に考えてみたいと思います。

大学院生のころ

わたしが子供の頃住んでいた地域は、ずらっと大陸からの引き揚げ者住宅と呼ばれたバラックが立ちならび、駅などひとの集まる場所では、傷痍軍人が、音楽を奏でながら、物乞いをしていました。わたしが、大学院に入った頃は、日本は、もうそこまでは、貧しくありませんでしたが、それでも、おそらく、多

くの人たちが、物質的に豊かになることを、一つの目標としていたのではないかと思います。

そんな中、友人、知人が何人も、牧師や宣教師になる道を選び、わたしは違う道を選択しました。もしかすると、その頃から、わたしは物質的に豊かになることに罪悪感のようなものを感じ、それから逃（のが）れられない状態だったのかも知れません。いづれにせよ、そのころ、決めたことがあります。

- 第一に、生活の経済的レベルを上げないこと。すなわち、大学院生の生活レベルを維持し、いわゆる贅沢をしないこと。
- 第二に、給料をもらっている間は、その二割を神様に献げること。

この二つをどのように守ろうとしてきたか、またその過程で考えた事や、葛藤を、お話ししようと思います。しかし、このことは、わたしの人生のとても大きな部分を占めてきたので、2時間や3時間では、とてもお話できないと思いますので、今日（きょう）は、ごくごくかいつまんで、この二つめの献金について少しだけお話しさせて頂きたいと思います。

ここには、学生さんも何人もおられますが、わたしがこの二つの決断をしたのは、給料をもらうようになる前の事でした。そして、わたしは、給料をもらうようになってから約35年たち、おそらくあと5年ほどで、その生活を終わろうとしています。いま、考えていることについてお話しすることは、学生さんたちにとっても、何らかの意味があるのではないかと考えています。

二割献金

最初に、お断りしておかなければならないことがあります。

まず、給与の2割を神様に献げると決めたのは、一生を神様に献げ、牧師や、宣教師になっていった友人たちをサポートしたいという気持ちとともに、神様に従うことにおいて、一信徒として、その人たちにひけをとるような生き方はしたくないという意地のようなものが強かったということです。

もう一つは、給与の何割かを、献金しなければならぬと神様が命じておられるとは、わたしは考えておりませんし、みなさんに、そのことをお勧めするつもりもありません。

ただ、そのことを決めて、守ろうとしてきたことから学んだことを少しお分かちしたいということです。

どれだけ献金しなければならぬとは神様は言っておられないと言いましたが、収穫の十分の一を神様に献げることが、旧約聖書に定められており、イエス様もそのこと自体を否定しておられるようには書かれていません。そこで、什一（じゅういち）献

金と言って、収入の十分の一を献げるよう勧めている教会もあります。

コリント人への第二の手紙 9 章 7 節には、

各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである。

と書かれています。小さい頃から、つねに儉約の美德を両親から教えられてきたので、わたしは、気前よくお金を使うのが、とくに自分が贅沢をして楽しむのが上手ではなく、つついけちってしまいます。自ら心で決めたとおりにといっても、おそらく、わたしは一割献げると決めると、いろいろと理由をつけて、献金も儉約して、心に決めたより少しずつ少なくなってしまうだろうと考え、思い切り二割と定めたのです。そうすれば一割など気にしなくなるだろうと思って。

献げることについて

なぜ献げるのか

では、なぜ神様に献げるのでしょうか。よく「神様にお返しする」と言いますが、コリント人への第一の手紙 4 章 7 節にあるように、わたしたちが「持っているもので、もらっていないもの」は何一つないからです。神様に、一部をお返しすることで、わたしたちが、神様のものであることを、定期的に確認することができます。

Peace Bell Donator

では、お金に余裕のあるひとが、もしくはお金の余裕のあるときに、献げればよいのでしょうか。ICU の奨学金に、Peace Bell 奨学金というものがあり、この教会も、一学年につき一人ずつ奨学生として支えることになっています。あるとき、その Peace Bell の寄付者のひとりが、奨学金受給者の前で「みなさんは、寄付をする人は、お金が余っているから寄付をするのだと思っているかも知れませんが、それは違います。お金がいくらあっても、寄付をしない人もいます。この奨学金の趣旨に賛同し、みなさんの勉学を支えたいと願っているから献げているのです。」と言っておられました。わたしは、献金も、お金の余裕があるからとか、人並みには、献金した方が良さそうだからではなく、それが価値あることだから、喜んで献金するのだと思います。

天国投資

マタイによる福音書 6 章 19 節から 21 節には

あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはならない。むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。あなたの宝のある所には、心もあるからである。

とあります。

献金は、信仰に基づく、天国投資の一つであると思います。自分の内にあるものに投資するのではなく、自分の外にあるもの、自分の手の届かないものに、希望をもち、そこに自分自身を委ねるという面があるのではないのでしょうか。

マタイによる福音書 13 章 8 節には、

ほかの種は良い地に落ちて実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。

とあります。わたしたちが蒔いた種を、わたしたちには、わからない所で、神様が成長させて下さり、実をむすばせてくださる。そのような投資の一つが献金です。

「あなたの宝のある所には、心もある」ことも、事実だと思えます。宝を天に積めば「心配になって」というのは、違うかもしれませんが、やはり気になる。手は届かず、自分ではどうすることもできないので、祈ることになる。神様に、その種（たね）を成長させて頂くように祈る。それが、日常的な信仰の営みになるのではないのでしょうか。

献げる事への抵抗

「あなたの宝のある所には、心もある」はその通りですが、実は、わたしはある頃、献げることに強い抵抗感を感じてしまった時期があります。わたしにとっての抵抗感は、人を信頼できないということから来るものでした。教会や、宣教団体や、慈善団体などに関わり、その舞台裏を知ってしまうと、献金が有効に使われるか不安で、献げること自体に抵抗を感じるようになってしまったのです。しかし、よく考えると、管理を委ねられているのは、個人的に知っている人たちであっても、わたしが献げているのは、神様である以上、わたしに求められているのは、神様に信頼することのほうです。わたしの献げた宝は、神様の完全な支配のもとにあるのです。なんと感謝すべきことでしょうか。

与えられているものは、神様から管理をまかせられているものですが、その一部を献げるということは、「自分は、神様から委ねられているものを、神様のために有効に使うことができる」という傲慢から解放されることではないのでしょうか。

Money Can Buy You Happiness

皆さんは、どのような宝、どのような豊かさを求めておられますか。手に入れば手に入れるほど、もっと欲しくなる豊かさではなく、その時々には神様の恵みの豊かさを感謝できるような、そのような豊かさに、わたしは与りたいと願っています。

先日の大学礼拝で経済学のモンゴメリー先生が“Money Can Buy You Happiness”「お金で買える幸せ」というタイトルでメッセージをしてくださいました。どうしたらお金で幸せが買えるのでしょうか。お金で買える幸せとは、どのような幸せだと思いますか。十分な内容をお伝えすることができないのが残念ですが、簡単にいうと「自分のところに留まっている 500 円は、それだけの価値しかないけれど、おなじ 500 円でも、自分の手を離れると、ひとが幸せになり、自分も幸せになる」ということだったと思います。握りしめていた手をそっと開き、握りしめていたものがふわっと解放されて生きて働く、そのようなことを通して得られる豊かさ。なにか、ぞくぞくとしませんか。

パンさき

マタイ 15 章に戻ってみましょう。ここでは、どのようにしてパンが増えたかは書かれていません。しかし、「一同のものは食べて満腹した」とあります。そして、パンくずをあつめると七つの大きな籠（かご）がいっぱいになりました。

最初に、イエス様は、感謝しておられます。イエス様にとって、十分な食べ物によって、みな満腹することは明かで、それを感謝しておられるのでしょう。神様はつねに、十分なものを与えておられることをイエス様は知っておられるのでしょう。私たちの目には、その場で使いのものになりそうなものは、七つのパンと小さい魚（うお）がすこしだけしか見えませんが。

この世界にはあちこちで飢餓（きが）があふれ、一人ひとりが満腹するには食物（たべもの）が十分ではないように見えます。そして、イエス様は、32 節にあるように、何も食べるものがない群衆を憐れんでおられます。そして、私たちには、その危機的な状況を解決する十分なものが無いように思えます。

イエス様の「パンはいくつあるか」との問いに持っているものを献げると、イエス様は、感謝を献げられます。そして、イエス様がパンを割かれ、それを弟子たちが配ると、その人たちに十分であることが分かるのです。

わたしは、今日（きょう）の箇所、パンがどのように増えたか書かれていないのは、とても示唆的だと思います。その方法は、定まっていない。

明らかなことは、神様がわたしたちに与えておられるものは十分豊かで、有り余るほどであること。委

ねられているものを差し出し、イエス様が感謝してさいてくださったものを配り、一同が、神様の豊かさに与（あずか）ることができたと言うことです。

わたしたちも、感謝して、神様が、わたしたちをどのように用いられるか、神様の業をみせて頂きたいと思います。

おわりに

大学に職を得てから、33 年、結婚してから 30 年がたちました。予想もしていたとおり、給与の二割を献げようと決めても、ちょっとずつ値切ってしまう、おそらく、二割を超えて献げることができた年は、あまりなかったと思います。結婚してからは、家内に家計簿を付けてもらっていますが、年末に、その家計簿を出してきてもらい、家内と相談して、その年に献げた分で二割に満たない金額を、祈りに覚えてきた方や、団体に献げることをしてきました。

実は、子供が二人・三人と同時に大学に通った時も何年かありましたから、給与では足りなくなったこともあり、この方針を守ることに、家内と激論になったこともあります。しかし、貯金を取り崩し、毎年目標に近い額を献げようと努力して来ることはできました。神様と、家内と、家族に感謝しています。このようなことを、礼拝でお話するのは、不適切かも知れませんが、正直、今まで、神様に守って頂いて、お金に関して不足を感じることは、まったくありませんでした。残ったものを集めるといつもいくつもの籠（かご）がいっぱいになりました。

献げること、神様の豊かさに与（あずか）ることではないでしょうか。それがどのように表されるかは分かりませんが。

神様に信頼して、神様の業を見させて頂きたいと願っています。

祈り

祈ります。

天の父なる神様、どうか、あなたから委ねられているものを、お返しすることによって、わたしたちがあなたのものであることを確認することができ、あなたの豊かさに与（あずか）ることができるようにして下さい。

わたしたちが、強いられてではなく、心からの感謝をもって、喜んでそれをなす事ができるようにして下さい。そして、それによって、多くの人々があなたの豊かさを知ることができるようになります。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン。

Voice Memo:

<http://subsite.icu.ac.jp/people/hsuzuki/science/gospel/131124icuchurch.mp3>